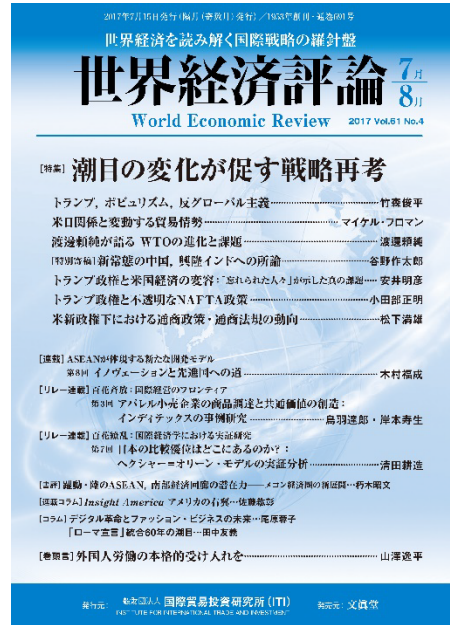


本論文は

世界経済評論 2017年7/8月号

(2017年7月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
 1,320円×6冊=7,920円 ▶ **6,600円** 税込 **17% OFF**
 送料無料



富士山マガジンサービス限定特典 ※通巻682号以降
 定期購読期間中 デジタル版バックナンバー **読み放題!!**



世界経済評論 定期購読

24時間・年中無休
 ☎0120-223-223

お支払い方法 Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。Fujiisan.co.jp
 お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

さる3月25日、EUの原点となる1957年のEEC（欧州経済共同体）条約、いわゆる「ローマ条約」調印から60年を記念するEU特別首脳会議が開かれた。加盟27カ国首脳と欧州理事会、欧州議会、欧州委員会の3人のトップが「ローマ宣言」に署名する式典の映像をみていて、オードリー・ヘップバーン主演のハリウッド映画「ローマの休日」（ウィリアム・ワイラー監督）をふと思い出した。筆者と同世代の読者諸兄であれば、この映画をご存知の方も多いことだろう。はっきりした記憶ではないが、初めて映画館で見たのは、高校生か、大学生の頃のことだったと思う。古希をすぎた今でも、BSテレビ番組から流される映像を幾度となく見直しては、ヘップバーンの優美な立居振舞の演技に魅せられている。

映画の中で、ヘップバーン演じる王女が記者から欧州統合について質問されて、連邦化に賛同すると答えるシーンは印象的だ。制作時期が1953年で、ECSC条約（欧州石炭鉄鋼共同体条約）、いわゆる「パリ条約」調印の2年後、ローマ条約調印の4年前ということになる。

ワイラー監督が欧州統合にどの程度の関心を持っていたのか、浅学非才の筆者にはまったくわからない。

予測不可能なトランプ米政権の誕生、英EU離脱の決定、債務危機で疲弊した南欧、パリ、ロンドン、ベルリンなどで相次ぐテロ事件、流入し続けるシリア難民、フランス、イタリアなどで台頭するポピュリズム、緊迫するウクライナ情勢やロシアの脅威等々、統合深化が翻弄され、EUが分裂の瀬戸際に追い込まれるのではないかという悪夢が、式典に出席した首脳たちの脳裏を横切ったに違いない。

ところで、ローマ宣言の中に、「我々はEUをより強靱にする。共に寄り添うことは、我々共通の利益を守るのにまたとない好機である」と結末を呼び掛ける一節がある。影の主演は、1973年の加盟から40年余欧州との関係を深めてきた後に、EUからの離脱を正式に決めた英国である。宣言に署名する27カ国の首脳たちの中には英国のテレザ・メイ首相の姿はなかった。これは統合史上初めての異例の出来事である。

さて、60年といえば、人間では還暦を迎えて、体力・気力の衰えをひどく実感する時期である。拡大続きだったEUも、英国が抜けて初めて縮小に転じ、勢いに陰りが見え始めた。還暦のEUは浮沈の潮目。宣言には「我々はこれまで同様、同じ方向へ進み、後から参加したい者には扉を開けておくと同時に、必要あれば異なるペースと度合いで共に行動する」と明記した一節があるが、英離脱後のEUを立て直すため、統合深化の多様性を容認したものである。

EUはこれまで曲りなりにも、全ての加盟国が一緒に行動する「護送船団」の伝統を守ってきた。宣言は、統合の理念を維持しながら、独仏など先行する中核国と、東欧などそれ以外の国との統合の速度が異なる「多速度」を容認するものだ。4月末のEU首脳会議は統合深化の新たな道筋を議論する予定である。「扉を開けておく」と、遅行する加盟国への配慮がなされているが、東欧などは猛反発している。さて、どのような将来像が描かれるのだろうか。

たなか・ともよし 駿河台大学名誉教授。

「ローマ宣言」 統合60年の 潮目